

宣耀殿の女御

御女、村上の御時の宣耀殿の女御、容貌をかしげにうつくしうおはしけり。内裏へ参り給ふとて、御車に奉り給ひければ、わが御身は乗り給ひけれど、御髪の裾は、母屋の柱のもとにぞおはしける。一筋を陸奥紙に置きたるに、いかにも隙見えずとぞ申し伝へためる。御目の尻の少し下がり給へるが、いとどらうたくおはするを、帝、いとかしこく時めかさせ給ひて、かく仰せられけるとか。

生きての世死にてののちのちの世も羽を交はせる鳥となりなむ

御返し、女御、

あきになる言の葉だにも変はらずは我も交はせる枝となりなむ

『古今』浮かべ給へりと聞かせ給ひて、帝、試みに本を隠して、女御には見せさせ給はで、「やまと歌は」とあるをはじめにて、先づの句の言葉を仰せられつつ問はせ給ひけるに、言ひ違へ給ふこと、詞にても歌にてもなかりけり。かかることなむと、父大臣は聞き給ひて、御装束して、手洗ひなどして、所々に誦経などし、念じ入りてぞおはしける。

帝、箏の琴をめたく遊ばしけるも、御心に入れて教へなど、限りなく時めき給ふに、冷泉院の御母后失せ給ひてこそ、なかなかこよなくおぼえ劣り給へりとは聞こえ給ひしか。「故宮の、いみじうめざましく、安からぬものに思したりしかば、思ひ出づるに、いとほしく悔しきなり。」とぞ仰せられける。

(左大臣師尹)

【口語訳】

(藤原師尹の) 姫君は、村上天皇の御代の宣耀殿の女御(藤原芳子)で、ご容貌がいかにも美しく、愛らしくていらっしやいました。宮中へ参内なさるとのこと、お車にお乗りになると、ご自身のお体はお車に乗っておられるものの、御髪はまだ母屋の柱のもとにとどまっていらいっしやいました。御髪の一筋を檀紙の上に置いてみると、少しも白い隙間が見えなかったと申し伝えているようです。御目尻が少し下がっていらいっしやるのが、いっそうかわいらしくいらっしやいましたので、帝はたいそう深くご寵愛になられて、このようにおっしゃったとかいうことです。

現世においても死後の世界においても、「比翼の鳥」となり、いつまでも離れずに愛し合っていきましょう。その御返歌として、女御が、

秋になっても(木の葉が色変わりすることもなく)、あなた様のお言葉にもお変わりがないのであれば、私も「連理の枝」となり、おそばをいつまでも離れずにおりましょう。

(女御が)『古今集』を暗記していらいっしやるということをお聞きになって、帝は、ために『古今集』の本を隠して、女御にはお見せにならないで、序文の「やまと歌は」とあるのをはじめとして、歌の初めの部分をおっしゃってはその続きをお尋ねになりましたところ、言い間違いをなさることは、詞書の部分でも歌の部分でも一つとしてありませんでした。こういう(暗誦試験のような)ことをしている、と父大臣はお聞きになると、正装なさって、手を洗い清めなどして、方々の寺にお祈りの読経などをお頼みになり、(ご自身でも、女御が成功するように)祈願なさったのでした。

帝は箏の琴をみごとにお弾きになられるが、(それも)熱心に(女御に)お教えになったりなどして、(女御は)この上もなくご寵愛をお受けになっていらっしやいましたのに、冷泉院の御母后(である藤原安子)がお亡くなりになられてからは、かえって甚だしくご寵愛が薄れてしまわれた、と世間でうわさとなっていらっしやいました。(帝は)「亡き中宮が、ひどく心外で我慢がならないことだと思っておられたので、(そのことを)思い出すと、(中宮が)不憫で、(女御を寵愛したことが)後悔されるのだ。」と仰せになられたということです。